

中国語と日本語における程度副詞の対照研究 —程度の小ささを表す副詞を中心に(二)—

時 衛 国

1. はじめに

拙稿(1996)では程度の小ささを表わす副詞について、中国語の「稍微」「略微」「多少」「有点」と日本語の「<少し>」「<少々>」「<ちょっと>」「<多少>」を取り上げ、動詞修飾の場合を中心に比較対照的立場から考察を行った(注1)。本稿は前稿に続き、形容詞(形容動詞)修飾の場合について、これまでの先行研究を踏まえながら、比較考察をしようとするものである。なお、考察語は前稿と統一するため、上記の八語に限り、それ以外の副詞は取り上げないことにする。

2. 先行研究

「稍微」「略微」「多少」については、呂叔湘(1965)、《現代汉语虚词例释》(1980)、《現代汉语虚词用法小词典》(1984)、《現代汉语八百词》(1984)、马真(1985)、《現代汉语副词用法分类词典》(1989)などは、形容詞などを修飾する場合にも「一点」「一些」「一会儿」などの共起語句と共起しなくてはならないという点では、共通しているが、しかし、被修飾語である形容詞がすべてそれらによって限定され得るかどうかが、それぞれどのような制約を受けるのかに関してはいずれも明らかにされていなかった。上述の研究を踏まえ、時卫国(1996)は「稍微+共起語句」との共起可否を基準に、形容詞をそれらに修飾され得るものと修飾され得ないものとに二分類し、前者に関しては更に六つのグループに分けて考察した。それによると、二音節語は一音節語より、プラス意味を持つ語はマイナス意味を持つ語より共起範囲が広く、受ける文法的制約が少ないことから、「稍微+共起語句」はプラス意味を持つ二音節の形容詞とよく共起する、という結論を得た。ただし、「稍微」と「略微」「多少」などとの使い分けに関しては述べる余裕がなかった。一方、「有点」に即しては《現代汉语八百词》(1984)、杨从洁(1988)、石毓智(1992)などは、修飾できる形容詞はマイナス意味を持つ語が多く、プラス意味を持つ語は否定形式でしか用いられないと論じているのに対し、程美珍(1989)、马真(1989)などは、それらを受けて「了」と共起すれば、プラス意味を有する語をも修飾できると付け加えた。ところが、「有点」が「有点冷嗖嗖的」などのように、形容詞の重ね形と共起することもあるが、それについては上述の先行研究では言及されていなかった。時卫国(近刊)では、「有点」は「ABAB式」と「BABA式」の重ね形のほか、形

容詞の多数の重ね形と共起できることから、「稍微」「略微」などと大いに違っているということ了指摘した。なお、これらの程度副詞に対しては、まだまだ様々な角度から再考の余地があるものと思われる。

<少し><少々><ちょっと><多少>に関しては、丹保健一(1981)、森田良行(1989)、渡辺実(1990)、赤羽根義章(1992)、和泉紀子(1992)、飛田良文・浅田秀子(1994)などの論考(注2)がある。丹保は<少し>について、それを<ほぼ><やや>と比べた上で、状态的語義を有し、ある状態の方向性が小さいことを表すと指摘し、三語の使い分け・文法的機能などをめぐって述べている。森田は、<少し>の意味と用法を中心に、たくさんの用例を挙げながら詳しく説明し、それと他の三語との文体的違いにも触れている。ただ、<少々><ちょっと><多少>についての説明はあまり行われていない。渡辺は、程度副詞について体系的に捉え、比較構文には立たない<とても>類と<結構>類を「発見系」、そして、比較構文に多用される<多少>類と<もっと>類を「比較系」とそれぞれ呼び、後者の<多少>類では<すこし><ちょっと>(注3)などを挙げている。また、<多少>類の用法・構文的制約などに即しても、他の類との比較をしながら入念に論じている。しかし、その論述には、まだ不十分な点があり、それを踏まえた上で、もっと深く研究しなくてはならないと思う。飛田・浅田は四語の使い分けと文体差・位置付けなどについて詳細な記述を行い、その文法的側面に対しても意欲的に説明している、というところは評価に値する。ただし、形容詞修飾時の用法に関してはあまり分析されていない。上述の研究は、四語の意味・用法や感情色彩などの認識に有益なものであることは言うまでもないが、各語の品詞的特色・共起範囲・文法的制約・意味表現上の諸問題などに関しては、未だに述べられていない。また、四語が修飾語として、どのように被修飾語に立つ形容詞に関わるのか、両者の相互的關係についても究明する必要があるであろう。本稿はこれらの問題点に十分に留意しつつ、四語を多角的に捉え、従来の研究を踏まえて、各語の意味用法を明らかにしたい。

3. 考察

3. 1. 肯定形式修飾の場合

3. 1. 1. そのままで共起できる形容詞

- (1) a 我说我一向很理性的，不轻易向人袒露感情，这回却有点儿隐忍不住，是不是有点(*稍微/*略微/*多少)怪?(私はいつも理性的で滅多に感情を出さないが、今回はもう我慢できないから、少しおかしくなっているのでしょうかと言う)
(方方「行为艺术」《新华文摘》1993年第5号P79)

- b 我说我一向很理性的，不轻易向人袒露感情，这回却有点隐忍不住，是不是(稍微/略微/多少/*有点) 怪点? (意味は例文(1)と同じ)
- (2) その人がこんな封筒を使うのは少し(少々/ちょっと/多少) おかしい。(石川達三「時の流れ」『若き日の倫理』新潮社P283)
- (3) a"电影都没有，散什么步?"儿子有点(*稍微/*略微/*多少) 烦。(「映画もないのに、どうやって散歩しろって言うんだ」といって、息子はちょっとうるさそうだった)(陈建功「放生」《中篇小说选》1993第二期P200)
- b"电影都没有，散什么步?"儿子(稍微/略微/多少/*有点) 烦了一会儿。(意味は例文(3)と同じ)
- (4) いつもテレビを大きな音声でつけっぱなしにしているので、夏など戸を開けていると、少し(少々/ちょっと/多少) 煩いと感じるほどであった。(曾野綾子『天上の青』P27新潮社1995)

「稍微」「略微」「多少」は例文(1)(3)のように、そのままでは形容詞の「怪」「烦」を修飾することができない。三語は修飾語としてそれなりの程度性は含有しているものの、微小な程度性を具体的に表出できないため、「一点」「一些」など微小な量や程度などを示す語句との共起が要求される。もしそれらの共起語句に助けを借りなければ、形容詞に対する修飾的機能を果たすることができないわけである。一方、「一点」「一会儿」などの数量詞は、「这个人是不是怪一点?」「她心里烦了一会儿」などのように、形容詞などの後に来てその程度の小ささや時間の短さを表すが、共起語句として使われた場合は、さらにその程度性と時間量を強調することができる。「稍微」「略微」「多少」は、それぞれ「一点」「一会儿」などの語句と共起すれば、「怪」「烦」などを修飾できるようになる。この場合は「稍微+一点」「略微+一会儿」「多少+一些」などのように修飾構造を作った上で、被修飾語の形容詞をその構造の中に納めて修飾限定することになる(注4)。三語は共起語句と共起しなければ、形容詞を限定できないという点では、動詞修飾の場合とほとんど変わらない。

文体については、前稿で述べたが、簡略に示すと、「稍微」は、話し言葉にも書き言葉にも普通に使われ、使用頻度が極めて高い。「略微」は主に書き言葉に使われ、日常会話にも登場するものの、「稍微」と比べれば、若干硬い感じを与える。「多少」は日常会話に多用され、文章に用いられた場合にも、くだけた感じがぬけない。三語はそれぞれ文体こそ異なれ、共起語句と共起して、「怪」「烦」などを修飾するという点では、ほぼ共通している。例文(2)(4)では、「自分の調子が普段と違ってややおかしい」「息子の気分がやや悪い」という内容については、三語はいずれも、その程度が高くないことを示しているが、具体的に言うと、「稍微」は、その程度の小ささも示すけれども、それよりも、その様子の存在を断定

的に捉え、その事実は間違いないということを明示している。「略微」は、その傾向が極わずかだという意味合いを含んでいるので、「稍微」以上「おかしい」「悪い」という状態の程度性の小さいことを示唆する。そして、「多少」は文字通りに、曖昧な語感を持っており、「略微」よりも、その程度の微小さを端的に強調できる。

「有点」は書き言葉にも使われるが、日常会話中心に用いられ、くだけた雰囲気強いという点では、「多少」と酷似している。そして量的概念を含有しているという意味では、「稍微」「略微」「多少」と余り変わらない。ただし、形容詞を修飾する場合にも構文上独立性が強く、単独に被修飾語を限定することができるという点では、それらと大きく違っている。例えば、例文(1)では、「有点」は「怪」をそのまま修飾し、その程度性が小さいことを表す。この点においては、常に共起語句と共起する「稍微」「略微」「多少」と全く異なり、「一点」「一陣儿」などの共起語句とは共起できない。

時衛国(1996)にも述べたように、「有点」は、動詞の「有」+数量詞の「点」から構成されたものと見られ、その構造内にはすでに「点」という量的要素が存在し、被修飾語限定の機能があるので、他の量的意味を示す語句を付加すると、冗長になるのであろう。従って、「有点」は、「稍微」などと文法的に大きく異なり、その他の量的表現の存在せぬ文法的環境下に生起すると言える。また、「有点」は意味表現上、呼応する形で用いられる「稍微」などはそれほど変わらないものの、「稍微」よりニュアンスが軽く、婉曲的な語感を作り出せる。例えば、例文(3)のaにおいては、「有点」は息子が少しいやになったことを示し、その程度性が高くないというところに重きを置く。それに対して、(3)のbにおける「稍微」は、共起語句を持つために、明確にその程度の小ささを強調するというイメージを伴っているように思われる。

日本語では、程度副詞というものは、主として状態性の強いものを被修飾語とし、その状態の程度の大小を基準にする。つまり、「形容詞の意味に内在している「程度性」が有形化して表されるのが程度副詞である」(西尾寅弥1972『形容詞の意味・用法記述的研究』P155)ということである。大多数の形容詞は状態的意味を表し、それらによって修飾され得る程度性を内包しているゆえに、程度副詞との共起が可能である。修飾語に立つ程度副詞と被修飾語に立つ形容詞は、構文的な結び付きが強く、共起頻度が高いことも予想される。この点は中国語でも同様である。

<少し><少々><ちょっと><多少>はいずれも単独で使え、独立した修飾性を有するという点では、「有点」と共通しているが、「稍微」「略微」「多少」とは全く違っている。森山(1985)がすでに指摘したように、<少し><ちょっと>などは、量と程度を共に表すことができる「量的程度副詞」であるものの、形容詞修飾にあたっては、量的概念を示すので

はなくて、主にその状態の度合(注5)を限定するという点では、<極めて><大変><とても>などの「純粹程度副詞」と共通し、ただその度合が小であることを強調するに過ぎない。

<少し>は書き言葉に使われる他に、会話にも頻繁に登場する。よって共起範囲が広いし、使用頻度も高く、あまり文体的束縛を受けない。ニュアンスは一定の硬さこそあれ、小さな程度性を明確に示すというところに特色がある。<少々>は、書面語的性格が強いせいか、文章語の場合も、硬質なコンテクストによく馴染む。そのため、丁寧な表現に使われた場合は、他の三語より適格であり、改まった雰囲気を作り出せる。<ちょっと>は、日常会話的性格が顕著であり、くだけた場面に多用され、丁寧な表現にはあまり現われない。また、硬い書き言葉や典型的な書面語にほとんど用いられないという点においては、<少々>と正反対である。<多少>は、話し言葉に多く使われるという点では、<ちょっと>とよく似ているが、くだけたニュアンスはあるものの、曖昧な表現として丁寧な場面にも用いられる。しかし、叙述性の強い文章にはあまり適格ではないと思われる。

四語は、いずれも程度の小ささを表すが、それぞれ異なった意味的イメージを有している。例文(2)を例にとって見ると、その人の封筒の使い方が一般常識をやや外れていることを強調するという点では、大して変わらないけれども、<少し>は、常識で判断すれば、その使い方がおかしいことをはっきりと断定し、その人の行為は異常なところがあり、規範性に欠けていることを暗示する。ひいては、それによって大きな問題に発展することはまずないという意味合いが含まれる。<少々>は、その使い方のおかしさの程度の微小さを断定的に捉えるという点では、大体<少し>と同じであるが、丁寧なニュアンスが強いため、発話者の慎重な姿勢を浮き彫りにすることができる。一方、<ちょっと><多少>は、その使い方のおかしさへの明言を避け、軽い語気を含有するという点では、ほぼ共通しているが、前者は、その程度の存在を認めると共に、話者の不満を込めているのに対し、後者は多かれ少なかれ、その様子がおかしいことを表すが、明確な断定をしない曖昧さがある。

四語は、中国語の程度副詞と同じく、「怪」「煩」に対応すると思われる「おかしい」「うるさい」を修飾できる。また、日本語では、「長い」「短い」「多い」「少ない」「大きい」「小さい」「遠い」「近い」などのような中性的イメージを有する形容詞と、「悪い」「眠い」「暗い」「辛い」「だるい」「ひどい」「むごい」などのようなマイナスのイメージを有する形容詞は、四語と共起することが可能である。なお、四語は、「長い」「悪い」のような形容詞を限定する際には、文法的制限がなく、そのまま共起することができる。この点では中国語と違っている。また、中国語では共起不可で、日本語では共起可能な形容詞もある(注6)。例えば、

(5) a*这个人长得{稍微/略微/多少} 凶恶一点。(「凶悪な形相をしている」の意)

b??这个人长得有点凶恶。(「凶悪な形相をしている」の意)

(6) この人は{少し/少々/ちょっと/多少} 凶悪な形相だが、実にいい人だ。

(7) a*这环境对他来说{稍微/略微/多少} 残酷点。(「この環境は彼にとっては残酷だ」の意)

b??这环境对他来说有点残酷。(「この環境は彼にとっては残酷だ」の意)

(8) 彼は{少し/少々/ちょっと/多少} 残酷な仕打ちを受けた。

中国語では、「凶悪」「残酷」「悲惨(悲惨だ)」「冷酷(冷酷だ)」などは、書き言葉的性格があり、硬い語感と強い意味合いが込められており、極めて高い程度性を含有し、程度副詞と共起可能なわけであるが、しかし、「稍微」などは、この種の形容詞を十分に限定できるだけの程度的意味が含まれていないため、程度的に釣り合いが取れず、共起しにくい。「凶悪」「残酷」「悲惨」「冷酷」に対応すると思われる、話し言葉的性格の顕著な「凶」「狠」「惨」「冷」は、「这个人长得{稍微/略微/多少} 凶点」「这个人有点狠」などのように、いずれも「稍微」「有点」などと共起することができる。これらの一音節語は意味的には、二音節語と根本的な異なりはないものの、語感的・文体的には大きな隔たりが存在する。「稍微」「略微」などの被修飾語への選択は厳格で、「凶悪」という意味の重い方の語彙と「凶」という意味の軽い方の語彙が併存する場合、意味の軽い方の語彙を選択することになる(注7)。ここから考えると、音節から生まれた意味の強弱は、文体差と場面差をつくり、それぞれの表現分野を支配し、ひいては程度修飾許容の可否にも繋がるものと指摘できる。

日本語では、「凶悪だ」「残酷だ」「悲惨だ」「冷酷だ」などは、いずれも<少し>などと共起することができる。これらの語も同じように書き言葉に多用され、硬いニュアンスを帯びており、くだけた会話にはあまり登場しないけれども、微小な程度修飾を拒否するような意味的強さは持っていない。また、中国語におけるような音節的制限も見られない。<少し><多少>などは、文体的束縛をあまり受けず、「ひどい」「むごい」というような意味の軽い方の語彙は言うまでもなく、「残酷だ」「悲惨だ」というような硬い文章語をも限定の対象とすることができる。実際には文体差と場面差も存在すると予想されるが、ただし、それらは修飾可否の決め手となるものではないことが断言できる。

3. 1. 2. そのままでは共起できない形容詞

(9) 他的字{稍微/略微/多少} 好点。(彼の字はまあまあだ)

(10) a*他的字有点好。(「彼の字はいい」の意)

b他的字现在有点好了。(彼の字は今は少し良くなった)

(11) a彼の字は{?少し/??少々/ちょっと/?多少} 良い。

b彼の字は{少し/少々/ちょっと/多少} 良くなった。

(12) a??她{稍微/略微/多少} 漂亮点。(「彼女はきれいだ」の意)

b她{稍微/略微/多少} 漂亮点了。(彼女は少しきれいになった)

(13)?她有点漂亮了。(彼女は少しきれいになった)

(14) a??彼女は{少し/少々/ちょっと/多少} きれいだ。

b彼女は{少し/少々/ちょっと/多少} きれいになった。

両語の程度副詞は、それぞれニュアンスや程度性こそ異なれ、いずれもそのままでは、形容詞(形容動詞)と共起しにくく、比較構文などの特定の比較表現によく馴染むという点では、ほぼ共通している。また構文的条件がプラスの意味に左右され、状態や事柄・様子などの現時点における変化を捉えているという点でも一致している。

「稍微」「略微」「多少」が共起語句を有し、ほとんど比較表現に用いられることは明らかである。比較の対象となる人間や事柄が文面に出てこなくても、その存在ははっきり意識できる。例えば、(9)と(12)のbでは、「他的字」「她(的容貌)」はそれぞれ「他人の字」「彼女が整形する前」と比べていると考えられる。(9)は他の人と比べれば、彼の字はそれほど良くないが、まあまあだという意味を表し、いずれにしてもベストではないことを強調している。(12)のbで、三語が「点」という語句と共起しても落ち着かないのは、被修飾語に立つ「漂亮」のプラスの意味のためであろう。「漂亮」は二音節語であり、強い語勢を持つので、一音節語の「好」よりも、更に大きな程度性と強い意味合いを含有しているように思われ、「稍微」などと程度的にも意味的にも調和できないから、表現として安定しないというわけである。しかし、「稍微」「略微」「多少」はそれぞれ「点」と共起し、すでに一つの修飾構造を構成しているので、更に「了」と共起すれば、「漂亮」を限定できるようになる。つまり、「了」と共起することによって、その構造全体の意味に新たな内容が添加され、それでまとものある意味表現がはじめて完成するのである。被修飾語のプラス意味による構造を取らないと、プラス意味を有する形容詞を限定できないからなのである(注8)。三語はこの種の形容詞を修飾する時、より一層の制約を受けるのではないかと見られる。

一方、「有点」は「好」「漂亮」などのプラス意味のある形容詞を修飾する場合、そのまま使えない。前述のとおり、「有点」という語は、少しあるという意味を含んでいるせいか、意味的にマイナス的・中性的形容詞と結び付きやすく、好ましくないことを表すことが多い。文字どおりにその意味に含まれた程度性が低いし、感情色彩(注9)も積極的ではないので、プラス意味のある形容詞と共起すると、両者の感情色彩が異なり、修飾語と被修飾語との程度差も激しく、均衡が保てないため、互いを受け付けない。「好」「漂亮」などは、

高い程度性を内包しているから、「很」「非常」など程度が大であることを示す程度副詞と共起することがしばしばあるが、「有点」とは単独で共起できない。しかし、「有点～了」(注10)のように、「有点」と「了」が結び付いて変化を表す場合には、「好」「漂亮」などは修飾され得る。プラス形容詞を修飾するにあたり、「了」がなくてはならない。「有点」は文法的制限を受け一方、「了」との共起によって修飾限定の範囲が拡大される。また、

(15) "唔-----" 蛤娃分不清这时自己的心情是更加沉重, 还是反而有点轻松? («ああ---」と、蛤娃は、この時自分の気がより重くなったのか、それとも、少し気軽になったのか、よく分からなかった) (林哲「梦里梦外」《十月》1993. 1P18)

においては、「是-----还是反而-----?」という選択疑問文に依存している。即ち、「有点」がプラス形容詞と共起できる文法的環境を作れるものは、「了」のほかに、選択疑問文などの文法的構造も可能だと言えよう(注11)。

日本語の<少し><少々><多少>は、比較表現にもそれ以外の表現にも用いられるけれども、非比較表現においては「良い」「楽しい」「頼もしい」「きれいだ」「安全だ」などプラス意味を持つ形容詞とは、共起しにくい。というのは、この類の語自体にはもうかなり大きな程度性を含んでおり、程度の小ささを強調する副詞とは、意味上・程度上のバランスがとれないからである。しかし、(11)と(14)のbのように比較表現に用いられれば、特定の程度性を示すので、いずれも適格となる。つまり、形容詞では共起できないけれども、動詞構文をとると、共起できる。この点では、3.1.1における形容詞とも、3.1.3における形容詞とも、鮮明な対照を成している。

一方、<ちょっと>は軽いニュアンスを含んでいるせいか、そのままでも共起できる。ただし、「～なった」などといった、変化を示す語句と共起するのがより自然である。この点では、他の三語と同じである。この場合は、固有の情況・様子を基準に比べることによって、その情況・様子の度合が少し高くなることを表す。例えば、(11)と(14)のbでは、彼の字と彼女の綺麗さは以前と比べれば、変化は起こったものの、たいした変貌ではないと、最低限に見積もっている。この中で、<少し><少々><ちょっと>は、全く満足できないけれども、その様子が確かに少しずつプラスへ行っていることを肯定的に受け止めている。それらに対し、<多少>は彼の習字と彼女の整形による努力を認可しているようであるが、言外に含みがあるので、場合によっては、「彼の字が良くなった」「彼女がきれいになった」という事実を全く認めないという意味合いにも取れる。

渡辺(1990)は<多少>について、{「*甲社のガードマンは多少頼もしい」「○甲社のガードマンは多少頼りない」「*あの道は多少安全だ」「○あの道は多少危険だ」(これらの例文はすべて同氏の論文による＝引用者注)}のように、「本当の計量構文(本稿でいう<非比較表

現>の構文にあたる＝引用者注)に用いられる時、Aの位置(被修飾語に立つ位置＝引用者注)には、話者によってマイナス評価の与えられたものが最もよくなじみ、少なくともプラス評価の与えられた語はAの位置になじまない」と指摘し、プラス期待を基準とした場合、<多少>がその基準に及ばないからだとしている。

氏は確かにその問題の一端には触れているが、しかし、<多少>がプラス意味を有する形容詞・形容動詞とそのまま共起できない原因は、外にもあり、それは両者自体の意味と関係しているのではないかと考えられる。プラスの意味を有する形容詞・形容動詞は、積極的評価を表わし、好ましい表現に用いられるので、その意味には大きな程度性を含んでいると思われる。よって、この類の形容詞は、同じく程度が大であることを表わす程度副詞と程度性が一致し、それと共起しやすい性格を有するのである。通常プラス評価にあたって、ある望ましい人柄や事柄などを褒めたたえるためには、<大変><非常に><とても>などの程度の大きさを強調する副詞が用いられる。このように高い程度性をその意味に含んだ、プラス的イメージを持つ形容詞(注12)と、<多少>などの程度が小であることを表わす副詞とは、意味的にも程度的にも相容れないから、修飾語と被修飾語として、そのままでは共起することができない。これは、程度副詞内部の対立は程度の大小と関わっている。

ところが、前述のように比較構文に使われたり、「～なった」などのような変化を示す語句と共起したりする場合には、文法環境が特定されるので、<多少><少し>などは、その比較・変化の程度の小ささを強調することができる。ここから考えると、<多少><少し>などは条件付きでこのタイプの形容詞と共起すると言える。

3. 1. 3. 全く共起できない形容詞

(16)*a这个学生{稍微/略微/多少} 优秀点。(「この学生は優秀だ」の意)

*b这个学生有点优秀。(「この学生は優秀だ」の意)

(17)*この学生は{少し/少々/ちょっと/多少} 優秀だ。

(18)*a那里的景色{稍微/略微/多少} 壮观点。(「あそこの景色は壮观だ」の意)

*b那里的景色有点壮观。(「あそこの景色は壮观だ」の意)

(19)*あそこの景色は{少し/少々/ちょっと/多少} 壮观だ。

両語の程度副詞はいずれも、「优秀/優秀だ」「壮观/壮观だ」などのタイプの形容詞(形容動詞)と共起できない。この類の形容詞はプラスの意味を持つという点では、3.1.2における「好/良い」「漂亮/きれいだ」などと同じである。文体的には丁寧なニュアンスが明らかに感じられるという点では、それらと違っている。つまり、「优秀/優秀だ」「壮观/壮

観だ」に含まれた意味合い・程度性及び文体の硬さなどは、「好／良い」「漂亮／きれいだ」をはるかに超えていて、特定の状態・性質などを強調するために、微小な程度限定とは不調和である。前述のように、「好／良い」「漂亮／きれいだ」は比較や変化を示す場合には微小な程度限定との共起が許容されるのに対し、「优秀／優秀だ」「壮观／壮观だ」は、

(20)*这个学生比过去{稍微／略微／多少} 优秀点了。

(21)*这个学生现在有点优秀了。

(22)*この学生は前より{少し／少々／ちょっと／多少} 優秀になった。

などのように、比較や変化を表わす場合にも、微小な程度限定との共起が不可能だということに特色がある。このグループに属する形容詞は、全く程度副詞というものと共起しないというわけではない。たとえば、

(23) 这个学生{很／非常／十分} 优秀。(この学生はとても優秀だ)

(24) この学生は{とても／大変／非常に} 優秀だ。

などのように、甚大な程度限定を表わす副詞とは程度性が一致しているので、共起する。ただ、その意味的属性はそれなりに定められているため、微小な程度限定とは相容れないのである。このタイプの形容詞は中国語では、また、「对(正しい)」「正确(正確だ)」「伟大(偉大だ)」「灿烂(輝かしい)」「高尚(高尚だ)」「珍贵(珍しい)」「光荣(光荣だ)」「雄壮(勇壮だ)」「豪迈(意気盛んだ)」「杰出(傑出する)」など、日本語では「正しい」「正確だ」「偉大だ」「輝かしい」「高尚だ」などがある。

(25)*a他们的结论{稍微／略微／多少} 相同点。(「彼らの結論は同じだ」の意)

*b他们的结论有点相同。(「彼らの結論は同じだ」の意)

(26)*彼らの結論は{少し／少々／ちょっと／多少} 同じだ。

(27)*a{稍微／略微／多少} 乌黑点的头发。(「真っ黒な髪(の毛)」の意)

*b有点乌黑的头发。(「真っ黒な髪(の毛)」の意)

(28)*{少し／少々／ちょっと／多少} 真っ黒な髪(の毛)。

両語の程度副詞は、「相同／同じだ」「乌黑／真っ黒い」などと共起できないという点でも全く同じである。この類の形容詞・形容動詞は、絶対的性質や状態などを表わすことが多く、構成的にも意味的にも程度副詞との共起が認められない。「相同／同じだ」は、二つあるいはそれ以上の物事が全く変わらない状態にあることを表わすので、絶対的属性を有する。「これは、これらの語の意味が、極限的とでもいうべき性質を持っており、普通の程度性を含んでいないためだと考えられる」(西尾寅弥1972『形容詞の意味・用法の記述的研究』P156による)。一方「乌黑／真っ黒い」は、構文的に分析すると、それぞれ「乌」+「黒」・「真」+「黒い」から成り立っており、「黒／黒い」は墨のような色を示し、「乌／真」は

その色の純粹さと極限性を決めることになる。即ち、「烏／真」は「黒／黒い」の色合いを絶対化する働きを負わされている。よって、構成的に絶対化した性質を含有し、それだけで極端な程度性を強調することができるものと思われる。

そのほかに、日本語では「小高い」「薄暗い」「分厚い」などは、それぞれ「小＋高い」「薄＋暗い」「分＋厚い」からなったものと思われ、「真っ黒い」などのような絶対的な程度性を持たないのだが、接頭語の意味によってその程度性が決められているので、他の程度修飾を受け付けない。「小高い」「薄暗い」の場合は、それぞれ「小」「薄」という接辞的要素によって、その「高さ」「暗さ」の度が規定されてしまい、それだけで、「少し高い」「少し薄い」という意味表現が成立するし、「分厚い」の場合は、「分」によってその「厚さ」の程度性が定められ、一語化した形容詞として程度的要素が内包されており、「かなり厚い」ということを表わすことができる。これらはいずれもその内的要素に制約を受けるため、程度の小ささを表わす副詞とあまり共起しない(注13)。

西尾寅弥(1972)では、形容詞と程度副詞との関係について述べられており、程度副詞と共起できない形容詞・形容動詞として、「真っ黒い」「同じだ」などは挙げられているが、先に述べた「優秀だ」「壮観だ」などが<少し><少々>などと共起できないということに関しては言及されていない。また、渡辺実(1990)でも述べられていない。「優秀だ」「壮観だ」などは微小な程度修飾を受容できないという意味では、「同じだ」「真っ黒い」などと同じグループにまとめられ得るが、前述のように甚大な程度修飾を受容するという点では、根本的に異なっている。また、3.1.2における、プラス意味を有しているものの、変化の程度修飾を受けられる「良い」「きれいだ」などとも違っている。この点については、従来の研究では提起されなかった。この問題の提起は、形容詞・形容動詞の意味的側面と文法的性格を知るのに大いに役立ち、形容詞・形容動詞の分類にも重要な手がかりを与えることができると思われる。

3. 2. 否定形式修飾の場合

(29)*我插在大衣口袋里的手开始{稍微／略微／多少} 不暖和点。(「コートのポケットに差し込んだままの私の手は冷たくなった」の意)

(30) 我插在大衣口袋里的手开始有点不暖和，不过还不到真正觉得冷的程度。(「コートのポケットに差し込んだままの私の手は少し温かさがなくなったが、まだ冷たいというほどではなかった」(陈冲「淡淡的是永恒」《人民文学》1993年11月号)

(31)??今日は{少し／少々／ちょっと／多少} 暖かくない。

(32) 我插在大衣口袋里的手开始(稍微/略微/多少) 有点不暖和。(コートのポケットに差し込んだままの私の手は少し暖かくなってきた)

(33)*今天有点不冷。(「今日は寒くない」の意)

(34)??今日は(少し/少々/ちょっと/多少) 寒くない。

「稍微」「略微」「多少」は共起制限に制約されているせいか、形容詞の否定形式と共起できない。三語はいつも、「一点」「一些」などの語句と呼応する形で用いられており、形容詞の肯定形式を限定する場合には、共起語句の助けを借りるしかないが、否定形式を修飾する場合には逆に共起語句の妨害を受け、否定の程度限定という機能を喪失してしまうことになる。ところが、(32)が示すように、三語は同じ程度副詞同士である「有点」と結び付いて、修飾構造(注14)を構成した時、否定形式限定も可能になるわけであるが、この場合は、「有点」を介して、間接に否定形式に関わるだけに止まり、その構造の文法的決め手ではないので、付随的性格が強いと言える。

一方、「有点」は、「稍微」「略微」「多少」と大きく違って、形容詞の否定形式とも共起できる。とはいえ、すべての形容詞の否定形式を限定できるというわけではない。中国語の形容詞は、大体プラスの意味を持つ語とマイナスの意味を持つ語とそして両者の間に立つべき中性的意味を持つ語とに分けられる。この三種類の語彙は否定形式を取ると、意味や感情色彩及び構成などが異なっているので、中性語のほかに、それぞれ反対概念を表わすことになる。プラス語の肯定形式と否定形式の関係は、文字通りに＋－であり、それぞれ物事の正負的關係を表し分ける上に、両方とも同様な程度性を持っていると考えられる。従って、その否定形式も「有点」によって修飾される。そして、マイナス語の否定形式はその肯定形式の反対意味を表わすのみであって、程度的意味が弱く、積極的評価にも使えないし、また肯定形式と違って、そのマイナス意味によって程度限定の受容的側面が狭められ、「一点也」というような特定の修飾語以外に共起しにくい。「有点」は、プラス語の否定形式が好ましくない事柄を示すのと感情色彩的にも一致しているから、それと結び付きやすい。また「很」「非常」などのように程度副詞らしい文法的特質を持つため、否定形式と共起できるのである。

日本語の程度副詞は、主に形容詞・形容動詞の肯定形式を修飾し、肯定の程度表現を構成することになるが、否定形式修飾の文法的機能を負わされていないため、否定の程度表現を構成することができない。日本語においては、普通陳述副詞といわれる<全く><全然><ちっとも><微塵も>などが形容詞・形容動詞の否定形式と共起することになる。これらの否定専用の副詞は肯定形式と共起せず、否定語と呼応する形でもっぱら否定的概念を強調するので、<少し><少々><ちょっと><多少>とは意味領域と共起範囲が全

く違っている(注15)。日本語では、周知の通り、程度副詞と陳述副詞とは異なった文法的役割を果している。特に否定の程度表現という点では、上述の陳述副詞は形態的には呼応する形で使われる、意味的には全否定を示すという二重構造を具有することが特色である。この点では、肯定・否定両形限定の機能を同じ語で担っている中国語の程度副詞と違っている。

4. まとめ

以上述べたことは、大体次のようにまとめられる。

中国語の考察語は、共起制限が厳しく、量的要素を伴わないと、形容詞などを限定することができないので、共起語句を添加しなければならない。形容詞の肯定形式と否定形式を共に修飾でき、綿密な程度表現を可能にすることができるという意義がある。

日本語の考察語は、独立性が強く、中国語の副詞におけるような添加的要素を不要とし、そのまま形容詞・形容動詞などを限定することができる。したがって、品詞にはあまりこだわらず、共起範囲は比較的広い。しかし、肯定の程度限定しかできない。

注

1、両語の程度の小ささを表わす副詞と動詞との共起に関しては、拙稿(1996)を参照されたい。本稿では、中国語の副詞は「」、日本語の副詞は<>で示す。以下同じ。

2、この中で、赤羽根氏は<少し><ちょっと>などが取立て詞との関わりについて論じている。また、和泉氏は森鷗外・夏目漱石・芥川竜之介の作品に出てきた、程度の小ささを表す副詞の文体差や順位付けなどについて、その用例を計量的に分析している。本稿では、本稿の内容と関係の深い代表的な論だけを簡単に振り返る形で引用紹介する。以下同じ。詳しくは各氏の論を参照されたい。

3、<多少>類には、<少し><ちょっと>のほかに、<やや><いささか><かなり>も挙げられているが、<少々>は出てこない。<少し><ちょっと>という二語と近似した用法をしていることから、<少々>はこの類に入るのではなかろうかと思われる。氏の論文を参照されたい。

4、三語は文体的には異なるものの、各種の共起語句を受けるという点では大体共通している。「稍微」がなぜ共起語句を取って、形容詞を修飾するのかという三者の共起関係については、拙稿(1996)が述べているので、ここでは重ねて論述しないこととする。

5、「多い」「少ない」を修飾する場合には、量の多少を問題としているかのように見えるが、状態の度合とも理解できる。というのは、両語の意味に含まれた量的概念がすでに状態化

して、相対的側面があり、本当の意味での量「例えば<沢山><少数>など」とは違っているからである。この点については、森田(1989)、飛田・浅田(1994)を参照されたい。

6、以下述べる内容は、中国語では共起不可だが、日本語ではそれに対応すると見られる語彙がそのまま共起できるので、両語の共起範囲を明らかにするため、ここに入れて述べる。

7、勿論、意味の重い方の語彙には、その意味にふさわしいと思われる高い程度性を含有しており、それで程度の大きさを強調する「極」「很」「非常」などと共起することが多い。一方、意味の軽い方の語彙には、その意味にふさわしいと思われる低い程度性を内包し、「稍微」「略微」などのような程度の小ささを強調する副詞によって修飾されるというわけである。言い換えれば、修飾語としての微小な程度性は、被修飾語としての軽い方の意味に合致していなくてはならない。このことは逆にも言える。修飾語と被修飾語という二者は、程度表現上、相互に対応すると見られる程度性を持つことが必要だと、考えられる。

8、一音節語の「好」が変化を示す「了」と共起しなくても修飾され得、そして二音節語の「漂亮」がそれと共起しなければならないということは、一音節語より二音節語のほうが更に高い程度性と強い意味合いを含有していることの証拠なのである。ただプラス意味を有する形容詞の中では、「好」のような一音節語はごくわずかで、「漂亮」のような二音節語は大多数を占める。

9、形容詞はその意味により、それぞれ好ましい表現と好ましくない表現に使われる。本稿でいう感情色彩とは、形容詞の有するプラス意味とマイナス意味のことを指し示す。

10「有点儿」がマイナス形容詞ともプラス意味を有する形容詞とも共起できる、という程氏の指摘は、従来の研究よりは一步進んだが、プラス意味を有する形容詞修飾時になぜ「了」を付けるのか、その説明はあまりされていない。马氏は「有点+形容词」「有点+(褒义)形容词+了」という二つの文型を明らかにしたのは非常に意義がある。ただし、後者に関しては、「有点儿」が「形容词+了」という構造を一括して修飾するとの分析は、「有点」が「了」と共起してプラス形容詞を限定するという構造の本質に迫っているとは思われない。

11、「有点」が「了」と共起せずにプラス形容詞を限定できる用法に関しては、今後の課題としたい。今回はこの問題を述べる余裕はないが、選択疑問文のような、「了」が共起しなくても「有点」が適格な文型は、外にもあるのではないかと予想される。

12、プラス意味を有する形容詞は、すでに述べたように、好ましい評価に使われるため、その評価に値するほどの程度性を持たなくてはならない。微小な程度修飾は、このような大程度のプラス表現には当てはまらないように思われる。この点については、中国語にも日本語にも言えるのであろう。

13、これらの形容詞は、程度の小ささを表わす副詞だけでなく、「*彼の家は{大変／非常に／とても} 小高いところに立てられている」「机の上には{??極めて／?相当／○かなり} 分厚い本がある」などのように程度の大きさを表わす副詞ともあまり共起できないという点では、共通している。しかし、<かなり>は、極点に達することを表わす<極めて>などと異なって、「分厚い」という形容詞との共起が認められる。一方、<相当>はやや不自然な感じを受けるものの、「分厚い」と共起することも可能であろう。この三語と「分厚い」との共起可否については、筆者は、十八人の日本人発話者(大学一年生十五名、二年生三名、いずれも文科系。年齢は二十歳前後、男性は十三名、女性は五名)にアンケート調査を実施した。その結果は簡単に示すと、以下の通りである。

①「机の上には極めて分厚い本がある」は、○2名 ?7名 ??7名 ×2名。

②「机の上に相当分厚い本がある」は、○7名 ?9名 ??1名 ×1名。

③「机の上にはかなり分厚い本がある」は、○14名 ?2名 ??1名 ×1名。

14、中国語では、程度副詞どうしが重ねられて使われることがある。本稿ではその一端を示している。なお、この問題に関しては、もっと深く研究する必要があるから、別稿にて述べることとする。

15、なお<少しも>という語があり、これは<少し>+<も>から構成されたものと思われ、<も>を受けることによって、機能的に変化が起こり、「*今日は少しも寒い」のように肯定形式と共起できなくなる。その代りに、否定形式と共起した場合は、「今日は少しも寒くない」のように全否定を表わす。<も>はもともと程度副詞である<少し>を改造して、それに陳述副詞的性格を持たせ、品詞的属性を転換させることにより、程度副詞的機能を無くしてしまうと説明できる。

参考文献

中国語

吕叔湘主编 1984 《现代汉语八百词》 商务印书馆

程美珍 1989 「受"有点儿"修饰的词语的褒贬义」 《世界汉语教学》第三期

姜汇川 许皓光 刘延新 宋凤英 1989 《现代汉语副词分类实用词典》 对外贸易教育出版社

石毓智 1992 《肯定和否定的对称与不对称》 台湾学生书局

时卫国 1996 「稍微+形容词+呼应成分」 《山东大学学报》(哲学社会科学版)

时卫国 (近刊) 「"有点"与形容词重叠形」

马真 1985 「"稍微"和"多少"」 《语言教学与研究》第三期

- 马 真 1989 「说副词"有一点儿"」 《世界汉语教学》第四期
王自强 1984 《现代汉语虚词用法小词典》 上海辞书出版社
邢福义 1962 「关于副词修饰名词」 《中国语文》五月号
杨从洁 1988 「不定量词"点"以及"一点"有点"的用法」 《语言教学与研究》第三期
郑怀德 孟庆海编 1991 《形容词用法词典》 湖南出版社

日本語

- 赤羽根義章 1992 「とりたて詞と副詞—「たくさん」「すごく」「ちょっと」「少し」のとりたてについて—」 『宇大国語論究』(宇都宮大学)四号
和泉紀子 1992 「鷗外・漱石・芥川の文学語彙—程度副詞少し・ちょっと・ややなどの場合—」 『愛文』(愛媛大学)27号
冲 久雄 1983 「小さな程度を表す副詞のマトリックス」 渡辺実編『副用語の研究』 明治書院
国立国語研究所(西尾寅弥)編 1972 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
国立国語研究所編 1992 『副詞の意味と用法』 大蔵省印刷局発行
時 衛国 1996 「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—程度の小ささを表す副詞を中心に(一)—」 『日本語研究』16号 東京都立大学国語学研究室
時 衛国 1998 「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—程度の小ささを表す副詞を中心に(三)—」 『外国語会誌』27号 大東文化大学
丹保健一 1981 「程度副詞の諸相—「ほぼ」「やや」「少し」を中心に—」 『国語学研究』21号
飛田良文・浅田秀子 1991 『現代形容詞用法辞典』 東京堂出版
飛田良文・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
細川英雄 1989 「現代日本語の形容詞分類について」 『国語学』158集
森田良行 1989 『基礎日本語辞典』 角川書店
森山卓郎 1985 「程度副詞と動詞句」 『国文学会誌』20号 京都教育大学
渡辺 実編 1983 『副用語の研究』 明治書院
渡辺 実 1995 「所と時の指定に関わる語の幾つか—意味論的に—」 『国語学』181集
渡辺 実 1990 「程度副詞の体系」 『国文学論』21号 上智大学

謝辞：本稿をまとめるにあたり、小林賢次先生をはじめとする日本語研究会の先生の方々、ならびに編集部の方々に大変貴重な御教示を賜りました。心から感謝申し上げます。